

## インテリゲンチア論

樺 俊 雄

### 一、問題設定

インテリゲンチアと称せられるものの存在も近代社会に至つてはじめて可能となつたと考えられる限り、インテリゲンチアの問題もまた近代社会に特有なものであると、言わなければならない。しかしインテリゲンチアという語が知識人と訳されるように、知識を備えている人間或いは知識において特に才能を有している人間というような一般的な意味においては、前近代社会においてもそのような人間を見出すことは、必ずしも困難ではない。現に古代ギリシアにおいても哲学者と称された人達は確にそのような種類の人間であるし、中世社会における僧侶達もまた同様であるとも、考えられるであろう。しかし、前近代社会におけるこれらの人間にインテリゲンチアという名称を与えることは、適当でないし、またそればかりでなく、今日われわれがインテリゲンチアの問題として取り上げるような特殊な

問題は、前近代社会においては全く問題とはならなかつたのである。

インテリゲンチア (Intelligentia, Intelligenz) はしばしば知識階級などと訳されることがある。それはインテリゲンチアと称ばれるような一つの社会層が考えられ、それが他の種々の社会層から区別されるという意味においてならば、必ずしも不当な訳し方ではないであろう。もつとも、それにしても、社会学的には階級という語を厳密に使用しなければならぬから、知識階級という場合の階級という語は極めて不正確な使用例だと、言わなければならない。しかし、それにもかかわらず、知識階級という訳語が何か人々を満足させるような意味内容を有しているかのように考えられるのは、何に由来するのであるか。その理由を詮索するならば、それは次のような事情のうちに求めらるであろう。そもそもインテリゲンチアの問題が特に問題として取り上げられるようになったのが、近代社会における階級対立が激化するに至つてから後のことである。そして、この場合、インテリゲンチアは対立するブルジョア階級とプロレタリア階級とのいずれにも属さぬ中間階級であるように、一般には見做されている。インテリゲンチアは自己の知性の力によつて、近代社会の構造とそれに由来する階級的支配の事実を認識するとともに、自己を支配的階級の陣営に従属させることを躊躇する傾向がある。しかし、それと同時に、インテリゲンチアはその自己の特性からして、自ら肉体労働者の階級に入ることには困難である。このようなインテリゲンチアの生活態度からして、インテリゲンチアは中間階級であると思はれ、そこから知識階級という語の捨てられない理由も出てくるのである。

右に述べたような意味においては、確かにインテリゲンチアは一種の中間階級的存在であると考えられるばかりではなく、近代におけるインテリゲンチア出現の歴史を考えるならば、それが最初中産階級を構成していたという意味においても、インテリゲンチアは元来中間階級であると、言えるようである。しかし、それにしても、知識階級という場合の階級という語は、ブルジョア階級とかプロレタリア階級とかいう場合の階級という語とは全く違ふ意味内容を

有していることに、注意しなければならない。さらにインテリゲンチアを、中間階級であるという意味において、知識階級と称ぶにしても、厳密にはそれは事実に合わない。けだし、インテリゲンチアが最初は中間階級として出現したし、またその社会的機能の点では中間階級的存在であるとは、言えるにしても、独占資本主義経済の段階に入つた二十世紀においては、インテリゲンチアはもはや必ずしも中産階級に属するとは、言えぬからである。

それではインテリゲンチアを特性づけるものは何であろうか。インテリゲンチアという語が知性 (Intellect) をもつ者という意味を有することによつてもわかるように、インテリゲンチアとは特に知性の点において他の人間の水準を抜いている人間を意味しているであろう。しかし、このような意味のものならば、前近代社会にも存在していたわけである。それゆえ、特に知性の点において卓越しているという条件だけではなく、その知性の力によつて生活を立てているという条件が加わらなければ、インテリゲンチアとはいえない。確に中世社会における僧侶階級は当時における學問の担当者でもあり、その伝達者でもあつた。しかし、彼等の生活は僧侶に規定されているような仕方、教会や修道院において神に奉仕することが主なのであつて、この主要目的を果す手段として學問を身に着ける必要があつたのである。しかるに、近代においてインテリゲンチアと称ばれる者は、その有する學問や知識が生活を維持するために、直接必要なものである、という点において、中世の僧侶階級とは根本的に異なる点がある。

それゆえ、近代においてインテリゲンチアと称ばれるものは、その有する知性的才能によつて生活を立てる者を、指している。そして、その知性的才能による労働は大体において精神的労働であるから、インテリゲンチアは肉体的労働者と區別して精神的労働者であるとも言われている。さらに肉体的労働者が近代社会においては殆んど工場労働者として、一定の企業体に雇傭されているのに対して、精神的労働者であるインテリゲンチアの多くのものは、一定の企業体に雇傭されることなく、いわゆる自由職業に属している。このようなインテリゲンチアに対する規定からし

て、まず作家、評論家、詩人、教授、新聞記者、出版編集者等のものが、狭い意味におけるインテリゲンチアであると考えられるが、さらに拡大した意味では工場における技師、会社のサラリーマン等も含めて考えられる。

ところで、このように職業的にも種々の職業に従事する人間を含み、階級的にも単に中間階級に属する人間のみを含むものではない、多種多様な者を含むものが、インテリゲンチアであるとすれば、かかるインテリゲンチアは果してインテリゲンチアというような名称によつて統括されることが正しいかどうか。こういう問題が、インテリゲンチア論の一つの論点をなすであろう。さらに、現代社会における階級対立が、否定しえない事実であるとするならば、かかる階級対立を超えた超階級的なものとインテリゲンチアを考へることが許されるかどうか。階級対立が資本主義経済の発展とともに、激化の一途を辿るものであるとするならば、インテリゲンチアなるものは対立する階級のいずれに属するものと考えられるか。このことがまたインテリゲンチア論における一つの論点を形成する。またさらに、一つの集団的乃至は階級的統一体であるかどうかは別問題として、インテリゲンチアと称ばれるものが存在する以上、そのようなインテリゲンチアなるものが現代の社会においてどのような位置を占め、またどのような社会的機能を営むものであるか——こういうことがまたインテリゲンチア論において解決すべき大きな課題となるであろう。

## 二、發生の條件

インテリゲンチアについて考察するに當つてまず第一に確定しておかねばならぬことは、それが近代社会における特殊な諸条件のもとに發生したということである。すなわち、インテリゲンチアという名称によつて称ばれる人間の社会的統一体は実に近代社会によつて生みだされたものであり、この意味において近代的現象なのであるが、このようなインテリゲンチアの歴史的社会的存在特質を明かにすることから、インテリゲンチア論は出発しなければならな

い。

インテリゲンチアという語が知識人と訳される場合があることによつても示されるように、自己の所有する高度の知識、高度の知性の働きを自己の職分とするような人間がインテリゲンチアであることは、確かである。しかし、高度の知性の働きを自己の職分とするだけではなく、かかる職分が自己の生計を維持するための職業と結び付いている場合にはじめて、今日われわれのいうインテリゲンチアというものが考えられる。それであるから、もし高度の知性の働きをもち、そのような働きを実現するところに、自己の職分を見出すような者がインテリゲンチアであるとするならば、そのような意味でのインテリゲンチアは古代社会にも中世社会にも見出されるはずである。例えば、古代ギリシアにおける哲学者や詩人や劇作家、或いは彫刻家や画家はインテリゲンチアであることになる。しかし、このような高度の知性の働きをもつ古代社会の学者や芸術家達は、今日の意味でのインテリゲンチアには属しない。もとよりインテリゲンチアという語をこのような意味のものまで含めるように拡大するならば別であるが、しかし今日のわれわれの語感からいうならば、このような者達はインテリゲンチアとは言えない。それというのも、これらの学者や芸術家は、必ずしも今日の学者や芸術家のように、職業的な存在であるとは、言いきれないからである。

中世ヨーロッパ社会においては、僧侶階級が古代以来の学問の唯一の継承者であつた。しかし、かかる中世の僧侶階級を指してインテリゲンチアであると、言うわけにもゆかない。けだし、僧侶階級はまさに僧侶階級という身分上および職業上の特殊な階級なのであつて、その本来の職分は神に奉仕することであり、かかる本来の職分を果すための一つの手段として学問の研究に従事したにすぎぬからである。中世社会においては哲学は神学の奴婢であつたばかりではなく、その神学の研究は究極においては信仰に帰するものであつたから、むしろ一般には学問は信仰の奴婢であつたと言ふべきである。しかも、このことは単に学問について言えるばかりではなく、芸術その他の高度の知性の

働きを必要とする人間精神の活動についても言える。従つて、僧侶階級が如何に高度の知性の働きを発揮することをもつてその職分としたにせよ、われわれはかかる僧侶階級をば今日の意味でのインテリゲンチアであると称ぶわけにはゆかない。

このように考えるならば、本来の意味でのインテリゲンチアの発生は近代社会のうちに求められなければならないことになる。ところで、もし近代社会の端初がルネサンス時代に求められるとするならば、この時代にインテリゲンチアの発生すべき条件が求められるかどうか、検討されなければならない。確かにルネサンス時代には近代的インテリゲンチアの発生する基礎的諸条件の或るものが与えられてはいる。例えば、中世社会においては學問が教会の權威に服従することによつて、真に科学的な研究と称ばれるようなものは、成立する余地がなかつた。その上、神學の奴婢としての諸科學も、究極においては教会の權威を高めるためのものとしてのみ研究されたから、學問も結局は僧侶階級によつて独占されて、一般人に対しては解放されることがなかつた。それに反して、ルネサンス時代になると、世俗的なものとされて來た事物の科學的研究も漸くその意義を認められるようになるに至つた。同様なことは藝術その他の一般の文化についても言えるのであつて、ルネサンス時代が文化一般の輝しい隆盛をもたらしたことも、不思議ではない。またその限りについて、知性が尊重されるとともに、高き知性の持主が敬意を払われるに至つた。*l'uomo singulare* とか *l'uomo universale* とかという名称によつて世間の尊敬を一身に集めた人々は、まさにそのような高き知性の持主であつたのである。

その上、封建社会が崩壊しはじめて、漸次封建社会の桎梏から解放されはじめたこの時代の社会は、高き知性の持主をそのようなものとして尊敬するとともに、そのような高き知性の持主を輩出させる社会的条件も作りだしつつあつた。それまでは、身分社会の故に、學問や藝術等の文化も一定の身分と結び付けられて存在することができた。し

かるに、封建社会の崩壊しはじめたこの時代にあつては、門閥や血統、因習や財産などは必ずしも知性の働きとは関係のあるものではないとされるに至り、ここに高き知性の持主が自由に輩出する原因をもつに至つた。イタリア・ルネサンスにおける優れた芸術家や学者の輩出はそのことを物語るものである。

このようにルネサンスの時代のうちに、今日のいわゆるインテリゲンチアの発生すべき条件の幾つかのものが作り出されているのであるが、しかし、この時代の知性人をもつて直ちに後のインテリゲンチアの先駆者であると、見做すわけにはいかない。というのは、今日のいわゆるインテリゲンチアのもつ知性の重要な機能は、人間に対して与えられた客観世界の徹底的合理化という点に見出されるのであるが、この時代の知性の持主の知性的機能は必ずしも合理的機能であるとはいえないからである。この時代における知性人の知性の機能は合理化に向つては、むしろ精神化に向つていると、言えるであろう。そのことは、イタリア・ルネサンスにおける知性人の働きが主として芸術的な方面において傑出していたことによつても、分かる。もちろん、この時代の知性人の活動のうちには合理的な面もあることは事実である。しかし、その重点はあくまで精神化的な面にあることは、レオナルド・ダ・ヴィンチの多方面に互る活動のうち芸術家としての側面が特に高く評価されたことによつても、理解される。

以上のことはマックス・シェーラーに従つて、作業知識と教養知識との区別を認めるならば、イタリア・ルネサンスにおいて高まつたのは、作業知識であるというよりは教養知識であると言えることも關聯する。\*再びレオナルド・ダ・ヴィンチを引合に出すならば、レオナルド・ダ・ヴィンチは作業知識の点においても優れた天分を示したにもかかわらず、一般には彼の絵画というような教養知識の面が特に高く評価されたのだとも、言えるのである。それ故、ルネサンスの時代にはインテリゲンチア発生の幾つかの条件は作り出されていたにせよ、むしろ今日のインテリゲンチアの先駆者と思ふべきものは、ルネサンスの次の時代に求めらるべきである。すなわち、われわれが今日

のインテリゲンチアの先駆者と目すべきものは、十七八世紀における絶対主義時代における学者乃至は思想家のうちに見出されるのである。けだし、この時代の学者乃至は思想家にはじめて客観世界の合理化を作業知識の形態において遂行することができるようになつたからである。この意味において、ガイガーがバロック時代のうちに近代のインテリゲンチアの先駆者を見出そうとしていることに、われわれは賛同することができるのである。\*

\* M. Scheler, Die Wissenformen und die Gesellschaft, 1926.

\*\* Th. Geiger, Aufgaben und Stellung der Intelligenz in der Gesellschaft, 1949.

近代民族国家は封建社会の解体とともに成立したが、その初期のものは絶対主義的王政の政治形態を取つていた。この時代は封建主義から民主主義へ移行する過渡的段階であると考えられるが、この時代の学者乃至は思想家の政治的方面における活動は、新しく成立しかけていた近代社会の合理的説明に向けられていた。また彼等の科学的方面における活動は、自然界を合理的に説明して、抽象的普遍概念たる法則のもとに個々の自然現象を包摂することによつて、客観世界を合理化することに向けられていた。グロチウスにはじまり、ホッ布斯によつて基礎付けられ、やがてはルッソーの社会契約論にまで発展する社会契約説の理論や、或いは自然法と社会契約説とに鋭い批判を向けて、社会の自然史的研究を行つたシャフツベリーからアダム・スミスに至るまでの一聯の思想家の理論は、まさに前者である。これに反して、ガリレイにはじまり、ニュートンによつて基礎付けられた自然科学の理論はまさに後者である。このように、その対象が人間世界であるか自然界であるかという差別はあるにせよ、対象を合理化しようとする点においては、これらの学者達の活動は共通点を有している。しかも、これらの学者達の研究は、シェーラーのいわゆる作業知識である点においても、共通している。このように十七八世紀における学者乃至は思想家の研究が作業知識であつた点において、この時代は、教養知識が主として高く評価され、また促進されたルネサンス時代とは、根本的に



異っている。しかも、大事なことは、この時代における學者乃至は思想家の多数のものはすでに大学乃至は實驗室において活動することによつて、彼等の生計維持の手段を見出していることにある。すなわち、単に高き知性の活動を職分とするだけではなく、同時にそれが職業化しかけている点においても、今日のいわゆるインテリゲンチアの先駆者であると、見做すことができる。

もちろん、この時代の先駆的インテリゲンチアの資格を完全に具えているとは、必ずしも言えない。殊にこの時代のイギリスやフランスの先駆的インテリゲンチアのなかには、いわゆる *gentry* と称せられる教養人も少からずいる。しかし、その知性の働きの方向が、人間世界や自然界というような対象の徹底的合理化に向つていた限り、ルネサンス時代の知性人とは異つて、今日のインテリゲンチアの先駆者と目さるべきものが出現したと、言うことができる。

このように、この時代に漸くインテリゲンチアの発生すべき具体的な条件が整いかけたというのは、その現象の背後に、資本主義経済の或る一定の段階への発展という事実の存在することを示すものである。すなわち、第一には、資本主義経済の発達はその社会的分化を促進させるものであるが、この時代に至つて漸く社会的必要が高き知性の機能を發揮することを職分とすると同時に、それを職業の内容ともするような種類の人間の存在を作り出したことを意味する。また第二には、資本主義経済の発達によつて促された生産力の増大は社会生活に余裕を作りだすことになり、精神的活動にのみ没頭するような人間の存在を可能ならしめるに至つたのである。ヴェブレンのいわゆる有閑階級 (*leisure class*) の出現はこの時代に至つて漸く見られるのであるが、先駆的インテリゲンチアの多くのものがかかる有閑階級の一部に属するものであることも、言うまでもない。そしてまた、この時代の先駆的インテリゲンチアの多数が、直接乃至は間接に、資本主義経済の発達に対して、その理論的研究の成果をもつて寄与したか、或いは資本主

義経済の発達と平行して発達し、しかもその基礎条件を作り出す結果ともなつた近代市民社会の成立に対して、その理論的研究の成果をもつて寄与したのである。

この時代における先駆的インテリゲンチアが、資本主義経済の発展に如何に多く寄与したかを、ここでは詳細に論ずることはできない。しかし、自然科学者について言えば、その多くの者がその理論的研究乃至は機械の発明によつて、資本主義経済の発達を促したことは、周知の事実である。またこの時代の哲学者達の哲学的思索の跡を考えてみると分るように、方法論がつねに彼等の思索の中心的対象となつてゐるが、このことは十七八世紀における資本主義経済の上昇という事実と照し合せてのみ、理解されることである。この時代における生産力の増大にとつては、生産方法の改善乃至は改良が重要な意義をもつていたのであるが、かかる生産方法の重要性に相應するものが、まさに哲学的思索における方法論の位置なのである。

また社会科学の分野における学者について言うならば、彼等の理論的研究の多くのものが、近代的市民社会の秩序を確立する方向に向つて進められていたことも、周知の事実である。自然法的社会契約説が如何に近代社会の社会秩序を説明するために努力したかは、すでに人々の知るところである。そして、かかる社会契約説の発展の流れのうちに、例えばモンテスキューの『法の精神』のうちに展開されたような近代的民主主義の根本原理であるところの三権分立の理論の如きものが生じたということは、このことを明確に立証するものである。或いはまた、同じく社会契約説の流れに立つていながら、それを徹底させるとともに、それを超克したルッソーの『社会契約説』がフランス革命の発生の思想的地盤を提供したということも、忘れられてはならない。このように自然法的社会契約説の理論は直接間接に近代的市民社会の秩序の確立に寄与したのであつて、従つてかかる理論の担手が多くは、この当時の新興ブルジョア階級の立場に立つていたものであることが、分かる。そのことは、さらに、当時の社会契約説論者が多くは、

封建的遺制を存続させていた絶対主義王政のイデオロギーである神政政治的理論の代辯者に対して激しい攻撃を加えたものであることによつても、理解されるのである。\*

\*この点については、詳細な説明がゾンバルトの次の論文によつて行われている。

W. Sombart, Die Anfänge der Soziologie, Erinnerungsgabe für Max Weber, 1923.

### 三、インテリゲンチアの發生

十七八世紀における先駆的インテリゲンチアは要するに先駆的インテリゲンチアであつて、今日いわれている本来の意味でのインテリゲンチアではない。けだし、彼等はその優れた知性の働きを自己の職分と考えていたにはせよ、彼等のそのような職分はまだ職業とは原則的には結び付いていないからである。自分の有する知性的能力によつて自分の生計を維持するために社会的な活動をするということ、言いかえれば、そのような職分が職業と結び付くということが、はじめて本来の意味でのインテリゲンチアを作りだすのであるが、そのような条件はこの時代にはまだ作られていなかった。それが作りだされるようになったのは、資本主義経済がさらに発達を遂げて、イギリス産業革命を惹き起し、さらにその結果として資本主義経済が一層生産力を増大させるに至つた時代、すなわちゾンバルトなどの言う意味での高度資本主義経済の段階に入つてからである。

しかし、インテリゲンチアの發生にとつて直接関係があるのは、ジャーナリズムの成立ということである。日刊新聞や月刊雑誌によつて作りだされるようなジャーナリズムが成立するためには印刷機械の發明や、印刷技術および交通機関の或る程度の發達が必要である。従つて、そのような發達がイギリス産業革命以後のことであることは、言うまでもあるまい。印刷術がドイツに起きて、やがて全ヨーロッパに伝わつたのは、一四五〇年から一五五〇年に至る

までの百年間のことであるが、しかし最初の新聞である London Gazette が刊行されたのは一六六五年である。しかし日刊新聞や月刊雑誌が発行されるに至っただけでも、またインテリゲンチアの發生の必要條件は整わない。そのためには、一般民衆の意見が尊重されるとともに、輿論が重要視されることが、必要である。なぜなら、輿論が重要視されるに至つてはじめて、輿論を喚起するのに必要である文筆家が職業的に活動するに至るからである。

こういう意味でジャーナリズムの機能が重要視されるとともに、ジャーナリズムに活動する文筆家が現れたのは、一七八九年のフランス大革命以後のことである。かつては革命政府軍に所属していたボナパルト・ナポレオンがクーデターを起して、連戦連勝の後皇帝を僭して以来、当時のフランスの進歩的な思想家分子は、ナポレオンの政策を批判攻撃した。この時ナポレオンの政策を擁護するために、ネッケル (Necker) はフランス国民の輿論を作ろうとして、盛んにジャーナリズムを利用した。輿論 (opinion publique) という語をはじめて使用したのも彼であると言われているが、フランスにおいてジャーナリズムが政治のために重要視されるに至つたのも、この時以来である。しかし、輿論の重視とともに、ジャーナリズムの利用は、フランスの敵側であるドイツにも及んだ。かかるドイツ国民の反仏抵抗運動のためのジャーナリズムは、例えばオーストラリアのメッテルニッヒと氣脈を通じたゲッレス (Göres) によつて大いに利用された。

このようにしてジャーナリズムおよびジャーナリストの先駆的形態が十八世紀末から十九世紀初頭にかけて現れているが、十九世紀におけるその後の資本主義經濟の發展は、漸次今日見られるようなジャーナリズムの成立の基礎を作りだすこととなつた。インテリゲンチアと称せられるものは、とにかく高度の知性の機能を發揮することによつて一定の職業上の地位を占めるものであるから、そのためには社会分化が相当程度進むということがインテリゲンチア發生のための必要條件であるが、十九世紀における資本主義經濟の不斷の發展とその生産力の不斷の増大とはジャ

ジャーナリズムを發展させるとともに、ジャーナリズムに依存して生活する一群のインテリゲンチアを發生させることとなつたのである。例えば最初の日刊新聞である The Daily Courant はロンドンにおいて一七〇二年に刊行されるに至つたし、また今日の意味での月刊雑誌の最初のものである The Gentleman's Magazine も同じくロンドンにおいて一七三一年に発刊されるに至つた。かくして十九世紀の第二半世紀にはジャーナリズムの形成は漸く盛んになり、それとともに、これに依存する一群のインテリゲンチアも作られることとなつたのである。

しかし、ジャーナリズムの形成と並んで、インテリゲンチアの發生にとつて重要な關係があるのは、かかるインテリゲンチアを養成する機関である大学の問題である。もちろん、大学の起源は中世に溯ることができ、また近代的形態の大学もすでに近代初期に發生している。しかし、十七八世紀における大学はまだ一部の特権階級の子弟の教育機関なのであつて、一般の庶民階級の子弟が相当多数大学に入るに至つたのは、十九世紀の後半に至つてである。けだし、近代初期における大学がイギリスの gentry の如き一部の上流社会の教養人を養成するためのものであつたのに反して、先進諸国の産業革命が一起度きてしまつた十九世紀の後半に至つては、漸次増大しつゝあつた株式会社や商事会社の設立とともに、それらのものにおける指導的な事務家や技師に対する要求が高まつたことによつて、一般庶民階級のなかからも大学の入学生が漸次増大していつたからである。

これが資本の集中と独占という現象が顕著となり、さらにその結果として二つの世界大戦を生むに至つた二十世紀になると、上述の現象は一層大規模なものとなつた。すなわちジャーナリズムの發展はますます上昇し、ジャーナリズムが対象とする人間の数が飛躍的に増大するとともに、ジャーナリズムを形成する機関の種類も増大するに至つたからである。さらに二十世紀になつてからの機械の質的向上や新しい種類の機械の發明、またそれと結び付いて、交通機関や通信機関の發達は真にめざましいものである。十九世紀の後半にすでに、例えば一八八七年にはエディソン

によつて電信が發明され、一八九四年には最初の映画が公開され、一八九五年にはマルコニーの無線電信が完成され、一八九七年には最初の記録映画が作製されたが、二十世紀に入るとともにそれらのものはさらに一層飛躍的な発展を遂げている。第一次大戦後にはラジオ放送も開始されるとともに、最初のタブロイド版の新聞は一九二四年に發行されるに至つてゐるし、週間雑誌の出現とともに月刊雑誌の種類と部数とは飛躍的に増大している。そして、さらに一九四一年以来は商業的テレビジョンまでが出現しているほどである。

大学や学校の種類や学生の収容数の点でも、二十世紀には、特に第一次大戦以後は飛躍的な増大が見られる。大学や専門学校における教育内容の種類が増加ということは、言うまでもなく資本主義経済の発達に伴う社会分化の進展に相応するものである。またそれらのものにおける学生の収容数の増加は、やはり同じく資本主義経済の発展に伴う会社、銀行、官庁、工場等の増加や拡張に相応するものである。かくして、今日においては大学や専門学校は卒業生を大量に生産して社会に送りだし、それによつて今日の官僚主義的機構の需要を充たす役割を果しつつある。高度資本主義経済が商品の大量生産をもつて、その経済の合理化の一つの重要な手段としてゐるのと同様に、今日の大学や専門学校はまさに社会に送りだすべき卒業生の大量生産を営みつつあるものだと言えよう。商品の価格が市場における需要と供給との比例によつて決定されるのと同様に、大学や専門学校における卒業生の大量生産は、その卒業生の社会的地位の低下を必然的にもたらさざるをえない。大学や専門学校の卒業生の大部分のものは今日ではサラリーマンとして社会的に活動する。近代初期における先駆的インテリゲンチアが、上層階級の出身が多いと同時に、その社会的地位も比較的上位にあつた。これに反して、今日のサラリーマン階級の社会的地位は大体において中産階級に属するといへ、第一次大戦前よりは以後の方が、第二次大戦前よりは以後の方がといった具合に漸次その社会的地位は低下する傾向がある。かくして、インテリゲンチアのプロレタリア化という現象がしばしば論議の対象となるの

である。しかし、今日のインテリゲンチアが全体としてはプロレタリア化しつつあるとはいえ、その意識の点においては必ずしもプロレタリア化しているとは限らない。意識の点でプロレタリア化していないということは、マルクスの用語に従えば、「即自的階級」としてはプロレタリア階級であるとしても、「即自対自的階級」としてはプロレタリア階級ではないことになる。また、インテリゲンチアの職業的地位が高度の知性の働きによつて取得されるものとすれば、そこからもプロレタリア化の現象がインテリゲンチア自身によつては自覚されぬこととなる。こういう問題については後に論ずることとして、ここでは二十世紀におけるインテリゲンチアが初期の先駆的インテリゲンチアとは比較にならぬほど低い社会的地位に就いていることを指摘することにとどめておく。

#### 四、インテリゲンチアの規定

前節におけるインテリゲンチアの発生の事情に関する説明は、インテリゲンチアなるものの存在が優越した意味で近代市民社会の所産であることを明かにしようとしたものであるが、それと同時に、そのような説明を通してインテリゲンチアという社会的存在の特質を明かにしようとするための、予備知識を与えようとしたものである。

その場合に、インテリゲンチアの発生の事情を説明すると同時に、その発生のための幾つかの条件も指摘しておいた。しかし、インテリゲンチアの発生にとつて最も重要な条件は近代市民社会の或る一定の段階に至るまでの発展ということであつた。このような事情からインテリゲンチアの特質を明かにする一つの手掛りが得られる。すなわち、インテリゲンチアがインテリゲンチアとして出現するためには、彼等の有する高度の知性の働きが社会的要求を充たすために、そのような才能によつて彼等が一定の職業上の地位を獲得することができるような社会的状態が現れる必要があつた。そこで、まず差当つて検討されねばならぬことは、彼等の有する才能であるところの知性についてであ

る。

元来、人間の知性というものは人間が与えられた環境に対して適應する精神的能力を指すのであるが、ルネサンス以後の近代市民社会においては特にこのような精神的能力が高まつたのであり、それによつて、近代人は近代的文明を作り上げたのである。ところで、このような環境に適應する能力ということは、言い換えれば、人間に対して無縁な、従つて非合理的な対象界を人間が征服して、それを人間の目的にとつて都合のよいものに作り上げる能力を指すのである。このような精神的能力をわれわれは知性と称ぶのであるが、近代人においてはこのような知性が前近代社会と比較して飛躍的に發達したのであり、しかも特にそのような面において卓越しているのが、いわゆるインテリゲンチアであると考えられる。このような意味で、インテリゲンチアの働きをマンハイムは「現存在の精神化」(Vergeistigung des Daseins)と称んでいるのである。かかるマンハイムの用語を批判して、ガイガーはそれを「現存在の一般的合理化」(allgemeine Rationalisierung des Daseins)という語によつて置き換えようとしている。<sup>\*</sup>

<sup>\*</sup> Th. Geiger, op. cit.

ガイガーが右のような用語をもつてマンハイムの用語に置き換えようとする理由は、次のようなものである。近代社会において一層重要性を増したのは、シェーラーのいわゆる作業知識であり、また思弁的科学ではなくして事実科学である。そして、このような近代社会において重要な役割を果す知識乃至は科学は、要するに現存在を合理化する点にその特質が認められると、いうのである。確かに、このようなガイガーの提唱には一応耳を傾けるべきものがあると、言わざるをえない。しかし、マンハイムの「現存在の精神化」という語も、必ずしも事態を正しく表現してい



ないとは云えぬのである。けだし、マンハイムが現存在の精神化といつても、それは必ずしも現存在の合理化を排除したような意味で言っているわけではないからである。われわれはこのような用語の使用法についての末梢的な論議に対しては余り興味がない。問題は要するに、近代人の知性が作業知識であり、環境に適応するための知識であり、環境を征服するための知識であるということを、確認することなのである。そして、さらに一層重要なことは、このような知識の発達に資本主義経済の発達を促し、また逆に資本主義経済の或る一定段階までの発達はかかる知識の発達を促すということである。

このように資本主義経済の発達と或る程度までは平行して発達して来た作業知識を有するものがインテリゲンチアであるところに、近代におけるインテリゲンチア発生の一つの条件があると、考えられる。もちろん、このような作業知識は、人間が環境に適応し、環境を征服するための実証的知識であると云つても、その環境といわれるものは、自然的環境と社会的環境との双方を含むものであるから、その知識は自然科学上の知識および社会科学上の知識を含むものである。従つてインテリゲンチアも当然この双方の知識の所有者を含むことになる。ところで、このような知識が資本主義経済の発達と平行して発達したといつても、インテリゲンチアのすべてが直接経済上の仕事と関係があるわけではない。教育、通信、交通、法律、政治、行政その他多数の直接経済に関係をもたぬ仕事に従事するインテリゲンチアも多数存在する。さらに、以上のような直接的に現存在を合理化する知識とは関係のない知識、例えば文学、美術、音楽、宗教、哲学等の知識の所有者としてのインテリゲンチアも存在する。このような最後の種類のインテリゲンチアの仕事はまさに「現存在の精神化」という語によつて、最もよくその本質が言い表わされるように見える。しかし、いかなる芸術家や宗教家や哲学者にしても、その精神作用のうちに合理的な要素を含まないことはないのであつて、そこにインテリゲンチアの近代的性格が指摘されるはずである。

ところで、現代においては、インテリゲンチアが職業上どのような形態をとっているかと云えば、その大部分のものはサラリーマンという存在形態をとっている。しかし、それにもかかわらず、特に狭い意味でインテリゲンチアという場合には、教授、弁護士、作家、評論家、詩人、新聞記者、出版編集者等々のものが考えられる。しかし、これらの狭義のインテリゲンチアといえども、その大部分のものは俸給生活者なのであつて、俸給生活者でないものは今日においては、作家や詩人や評論家ぐらいのものしかない。ところが、これらのインテリゲンチアといえども、その生活の手段としてはジャーナリズムに依存せざるをえないし、現代のようにジャーナリズム自体が極度に商業主義化するに至つては、これらのインテリゲンチアも必然的に商業主義的経済経営に間接に依存することとなる。

かくして、現代のインテリゲンチアは例外なく資本主義経済の支配のもとに服従することとなる。しかも、現代におけるインテリゲンチアの非常な量的増大は、彼等をしていやおうなしにその社会的地位を低下させる結果になつてゐる。例えば近代初期においては、経済方面におけるインテリゲンチアはその殆んどが企業家、支配人、頭取等の企業面における指導的地位に就くことができた。しかるに、現代の経済方面におけるインテリゲンチアはそのような指導的地位に就くことはごく稀であつて、その大多数は一介のサラリーマンとして終る。しかも、彼等の経済的收入はインテリゲンチアの増大に比例して低下するから、いわゆるインテリゲンチアのプロレタリア化という現象が発生するのである。

それでは、現代のインテリゲンチアはプロレタリア階級に属するかといえ、必ずしもそうとは言えない。けだし、部分的にはその所得が明白に中産階級的なものであるサラリーマンも少数はいるし、またいわゆる即自対自的階級という意味では大部分のものがプロレタリア階級には属していないからである。

インテリゲンチアがこのようにプロレタリア化する傾向をもちながら、しかも、現実には即自対自的階級としての

プロレタリア階級に属さない一つの大きな理由は、その仕事の内容に関係する。インテリゲンチアはいわゆる精神労働に従事するものであつて、プロレタリア階級は肉体労働者が構成するものだという觀念が、そのような事態を作りだす大きな理由である。しかし、精神労働と肉体労働という区別が如何に相対的なものであり、労働という以上、どんな労働にも精神的エネルギーと肉体的エネルギーとの消耗を必要とするものであることは、少し考えれば、自ら分かることである。しかし、さらにもつと尤もらしい理由がある。それは狭義のインテリゲンチアの或るものにおいては、精神的活動というインテリゲンチアにとつて必要な生産手段が彼等自身の手にあるがために、生産手段を所有しないプロレタリア階級にはどのようにしても属しえないという理由である。確かに、このような理由は、社会的名声を博した、作家、詩人等のインテリゲンチアについては、当てはまりそうである。しかし、少くともジャーナリズムが極度に商業主義化した現代においては、そのようなインテリゲンチアがそのような社会的地位を保持することは、すでに商業主義、ひいては資本主義に依存することになる。従つて、ジャーナリズムに依存して自己の社会的地位を保持することを肯定するようなインテリゲンチアはプロレタリア階級に属しないことはもちろんであるが、それと同時にブルジョア階級に属することは明かである。それ故、現代におけるインテリゲンチアのプロレタリア化という命題が肯定されない場合は、そのようにインテリゲンチアのなかにもブルジョア階級に属するものがあるという事実によつて支えられているのである。

しかし、インテリゲンチアが現在の資本主義経済の段階において、ブルジョア階級かプロレタリア階級かの何れかに属するということが、事実であるとしても、それだけではインテリゲンチアの問題は解決されていないのである。インテリゲンチアがインテリゲンチアと称されるような特質をもつものである以上、そのような評価に即してインテリゲンチアの社会的な地位および課題を検討するの でなければ、充分だとは言えないのである。(未完)